

メールレター (7)

美しい晩秋が奇跡的に続き、小春日和の日差しが心を和ませてくれています。日暮れが早くなり、隙間風が吹き、枯葉がカサコソ空っ風に舞う冬は、それでも、もうすぐそこなようです。暖房を朝晩入れていたのが一日中いれるようになり、日を追うごとに、その温度が上がっていくと本格的な冬になります。

こんな初冬に、国を挙げて楽しむのが10月31日のハローウィンです。死霊を祭ったり厄除けの意味があるようですが、畑でとれるカボチャをくりぬいてランプにするところを見ると、何やら農作物の収穫とも関係があるのかもしれませんが。お化けや骸骨など、色々、ユニークな衣装した子供達が、カボチャのランプの灯っている家を回って、お菓子をもらうお祭りです。当節は、大人も、子どもに負けずと、朝から衣装して街中を歩いていることも少なくありません。ただし、大人はお菓子を貰いに家を訪ねることはないようです。スーパーのレジのお姉さんたち(いえ、おばさんたち)も、この日は衣装して働いたりします。お化けがレジ打ちをしています。我が家のドリトル先生のアルバイト先の動物病院の受付嬢などは、猫に衣装したりするようです。

衣装した子供達は、日暮れになると、カボチャランプの灯る近所の家をぐるーっと一回りし、カゴいっぱいにお菓子を貰い、帰ってくると、今度は玄関先で、やってくる他の子供達にお菓子を配ります。これで1年分のおやつを溜め込む子供もいますし、虫歯が増えないように取っ組みあいになりそうな勢いで子供のお菓子を取り上げて、諦めさせる親もいます。少なくとも、ハローウィンの夜は、子供達は念入りに歯磨きをした方がよさそうです。

子供達を迎える大人達も工夫を凝らして迎えることも少なくありません。去年のこと、

「和子、今度のハローウィン飾りは、我ながら成功だったわ。」

「あらー、よかったわね。」

「すごく大きなカボチャをくりぬいてランプにしてね、その上に小さなカボチャをおいてね、かぼちゃの皮を切って、大きな耳にして両耳つけてね、頭にはドライフラワーになっている庭の紫陽花の花を糊でくっつけたのよ。ほら、仏陀よ。頭がぼちぼちになってるでしょう。仏陀カボチャランプ。」

「そうなんだ。仏陀なんだ。子供達にお菓子あげるから、座禅しろなんていわなかったでしょうね。」

「言わない、言わない。」

「その後、友達呼んで仏陀ハローウィンパーティしたのよ。」

ハロウィンは大人達も、皆、楽しそうです。我が家の一角は石作りの古い建物が立ち並び、真夜中の暗がりには墓場のような静けさなのですが、ハロウィンの夜に骸骨に仮装した人たちがたむろしていた時には、さすがに腰をぬかしてしまいました。

ハロウィンは宗教的なものではなく、北アメリカのポピュラーな風習と言った方が良いでしょう。我が家の哲学者、ドリトル先生は、娘が小さい頃は、

「死者は、墓場でそっと眠らせておきましょう。厄病神も刺激は避けましょう。それをネタに遊んだり、お菓子でつるなどもってのほかです。我が家では子供達にはこんなことはさせなくてもいいから。」

「でも、お友達、皆、仮装して楽しそうに遊んでいるし、お菓子貰うのも楽しそうよ。」

「お菓子はたくさん買ってあげればいいと思うよ。訳のわからない物は食べない方が良いでしょう。」

「単なる遊び心なのに。遊びよ、遊び。」

「死者と遊んではいけません。ところで、娘は、どこに行ったの。姿がみえないね、今夜は。」

「貴方の所にはおばけぐらいしか来ないわよ、今夜は。」

というわけで、娘は、ハロウィンの度に、我が家をスルーして、友達の家にお泊まりをして楽しむことになりました。